

## 資料紹介

### 甲斐有雄の明治十年日記について

木山貴満

#### はじめに

熊本県文化企画課松橋収蔵庫では平成二二年(二〇一〇)五月一二日から六月一八日にかけて、企画展示「ふたつの明治十年日記く神官・石工が記した西南戦争」を開催した。同展示では阿蘇郡高森野尻村の神官・安藤経俊と、同郡高森尾下村の石工・甲斐有雄の二人が記した、明治一〇年(一八七七)日記を展示主題とした。明治一〇年はいくまでもなく、最大の土族反乱にして日本最後の内戦となった西南戦争が勃発した年である。従来、西南戦争従軍者の日記はいくつか紹介されてきたものの<sup>1</sup>、政府軍・薩軍参加者以外の日記が注目されることは少なかった<sup>2</sup>。本展示では「両軍参加者以外の人びとから見た西南戦争」を基本テーマとして、西南戦争の新たな一面を描くことを目指した。

展示主題とした二人の日記のうち、安藤経俊日記は『一神官が見た西南戦争』としてすでに紹介されている<sup>3</sup>。一方、石工・甲斐有雄の日記は『火の国軍物語』としてその存在が知られていたものの、日記の原本が紹介されたことはなかった<sup>4</sup>。本稿ではこの甲斐有雄「明治十年日記」について、その基本的性格及び概要を示すとともに日記内容全体を通覧してみたい。

### 甲斐有雄と明治十年日記

阿蘇郡高森尾下村の甲斐有雄は、阿蘇原野一帯への道標建立によつて知られた人物である。阿蘇の原野を行き交う旅人の為に文久年間より独力で道標を建てはじめ、生涯で建立した道標総数は数千基に及ぶといわれている。有雄の道標事業は熊本藩、熊本県などから随時褒賞を受けており、昭和三六年(一九六一)には熊本県近代文化功労者としても表彰されている。

明治期以降、石工として生計を立てていた甲斐有雄は、尾下村の頭百姓であった父・大助とともに多くの日記資料を残している。文政九年(一八二六)から明治四一年(一九〇八)にかけて父子二代・約八〇年分に及ぶ日記は、近世後期から明治期における阿蘇地域一帯の様子を知る上で貴重な資料である。

こうした日記のなかでも、西南戦争が起こった明治一〇年の日記は重要な意味を持つ。当該日記を記した有雄は、当時宮山村(阿蘇郡西原村宮山)一帯を拠点として石工仕事を行っていた。有雄は日々道標建立などにも取り組む中で西南戦争を経験し、日記を書き綴っている。政府軍・薩軍参加者の日記に対し、有雄はいわば「一般民衆」的立場から戦争の様子を記録しているのである。ここで更に注目されるのは、有雄が同年七月から政府軍の軍夫として従軍していることである。管見の限り、西南戦争における軍夫が記した日記というものは紹介されることがない。有雄が残した日記は「一般民衆」(非戦闘員)的立場、従軍軍夫としての

立場から記されたという二重の意味で重要な資料といえる。

日記は切紙の二つ折りを、横長帳として綴ったものとなっている。縦六・〇cm、横一七・〇cm（ただし、表紙法量）の比較的小さなものだが、これは常に携帯して日々記入されたという日記の資料性格を反映したものでだろう。帖数は一四九枚だが、現状日記は再装丁されたものとなっている（日記写真参照）。日記は一部日付の順序が乱れているが、これは再装丁された際に誤って綴じられた可能性が考えられる。また、日記の所々に焼痕と思われる欠損が見られるほか、五月後半から六月にかけての記述が欠落している。後年有雄が高千穂に居住した際、火災にあったと伝えられており、この日記も罹災したのかもしれない。

日記本文には基本的に日付（新暦・旧暦）、天気、出来事の順でまとめられている。安藤経俊日記と比較した場合、各項目が箇条書きでまとめられていること、記述内容の多くが伝聞情報となっていることなどが相違点として挙げられる。恐らく戦争の混乱のなかで人びとが交わっていた情報や、有雄が意識的に収集した情報が日記として記録されたと思われる。また、狂歌や絵を趣味とした有雄は日記に多く狂歌・和歌を書き付けており、目にした風景などもスケッチしている。この点も安藤日記との比較で目立つ特徴である。

ちなみに、圭室諦成氏によって明治一〇年の甲斐有雄日記として紹介された『肥の国軍物語』（以下、『軍物語』）は、後年有雄が当該日記を自身で編集したものと考えられる。『軍物語』は

日記原本と基本的な記述内容などは一致するものの、語句の修飾が新たに為され、有雄の所感などが付加されている箇所がある。日記の途中で挿入されている和歌なども、推敲が加えられている。また、最も大きな相違点は、『軍物語』は二月から五月にかけて約三ヶ月間の内容となっていることである。有雄が軍夫として従軍した、七月以降の動きについては記されていない。『軍物語』の文末からして、有雄は意図的に従軍の記録を省略したものである。が、その理由は明らかでない。

以下、実際の日記内容について、適宜西南戦争の戦況も参照しつつ日順に沿って見ていきたい。ただし、通覧にあたっては再装丁された資料現状の順序ではなく、筆者が復元した日付順序に従うものとする。

#### 一 熊本城炎上と西南戦争の開戦

明治一〇年二月一五日より鹿児島を出発した薩軍は、早くも一八日には熊本城下へと迫った。絶対死守を命じられた熊本鎮台は、薩軍の熊本城攻撃に先立って城下の焼毀を実行した。いわゆる「射界の清掃」と呼ばれるものである。これは城下家屋が薩軍に遮蔽物として利用されることを防ぎ、攻撃目標となる薩軍勢の姿を発見しやすくするために行われた。焼毀前日の一八日には熊本県庁より熊本市中の老人・子供らへと避難命令が出されている。一九日午前一時過ぎ、熊本城下に火が付けられると熊本の町は逃げまどう人々で大混乱に陥った。さらに時を同じくして熊本

城天守からも出火し、混乱に拍車をかけることとなった。

甲斐有雄は二月一九日の日記で熊本の方角に大砲の音が三発聞こえ、五ツ(午前八時)から八ツ(午後二時)まで煙が見えた、としていいる。実際の焼毀開始時間と三時間ほどの差があるのが気になるが、有雄が見たのは城下が燃える様子であったとみて間違いないだろう。恐らく三発の大砲は焼毀開始を知らせる号砲であったと思われる。さらに有雄は一八日から熊本町へと出かけていた、井手ノ口(出口)甚蔵・小牧脇右衛門という人物から熊本町混乱の様子を聞いている。

これによると、甚蔵たちが人夫仕事で荷物を運び、紺屋町に入ったところで城から黒煙が燃え上がった。「それ逃げよ」との掛け声に走り出すと、町の至るところで火が起こっているのが見えた。たちまち町は混乱に陥り、「一生けん命」に走って逃げる甚蔵たちの周りも大勢の人びとが逃げ惑った。

大急ぎで村へ戻ってきた甚蔵らは、これらの様子をすぐに有雄たちへ知らせたものと思われる。熊本城出火、町焼失の知らせは即日県下に広まっている。が、多くはこのように伝播したものである。

さらに、有雄は熊本町へと出かけていた別の村人からの話も書き留めている。熊本城をはじめ、慶徳堀、明午橋、新屋敷まで焼けたこと、家屋は皆戸を閉めていて一人も出歩く者はいないとのことである。ただ町中を歩き回るのは政府軍の巡査ばかりで、不審な者は切り捨てられるとの噂が飛び交っていた。熊本の町が一

日にして西南戦争の「戦場」となった様子がうかがえる。同日、有雄は「遠目かね」(望遠鏡)で川尻に船が多く浮かんでいるのを目撃している。

熊本城天守の出火原因については、西南戦争当時から諸説唱えられた。熊本鎮台にいた薩軍内応者による放火説、炊事場付近からの失火説、熊本鎮台による戦略的自焼説などがその代表的なものである。

有雄は熊本城の出火原因について、どう考えていたのだろうか。天守が燃え落ちた二日後、二月二一日条の日記に次のように記している(引用文中の句読点及び括弧内は筆者によるもの。以下同)。

「なげかわしきハ肥後の熊本とて、鎮台も居り九国二嶋四国の兵も集、繁栄の色めき賑しき都にて、ハふり本とからハ手もあてられぬよふがひ(要害)を、内からやぶる栗のいがもがたちかくるひやぶり、初て鎮台をうちしよりおたやかならず、又もさつ州(薩州)よりせめる噂かな」

「考難義も出たりけん二、熊本の旧士もさつ(薩)よりたまされしならんか」

手も付けられないような要害(熊本城)を「内から」破った、としており、有雄は薩軍内応者による放火を推定している。これに続けて傍線部では、熊本の旧士族たちが薩摩より騙されたのではないか、とも述べている。熊本の旧士族による薩軍への助力・協力は熊本鎮台も開戦前から危惧したものであり、池辺吉十郎らによる熊本隊結成などが現実として進行した。当時、有雄と同様

の見解を持った人びとも少なくなかったのではないだろうか。また、有雄は『軍物語』においても改めてこの見解を主張している<sup>1)</sup>。が、熊本の上士族が「前つかた鎮台を聞討ちし(神風連の乱)」、今度も薩摩が攻め込んできたのを幸いに焼立てた、と前年からの連続性を付け加えている。

「肥後狸薩摩狐にだまされて、西郷べ(最後っ屁)かふた(嗅いだ)面のぬくさ(温さ、憎さ)よ」という、両士族を揶揄する狂歌も添えられている。

薩軍による熊本城総攻撃は、二月二二日から開始された。翌二三日にかけて段山口などで激しい戦闘が繰り広げられたものの、熊本鎮台による必死の防戦の前に熊本城を一蹴するという薩軍の目論見は外れた。全軍による熊本城強襲策から長圍策へと切り替えた薩軍は約三千の兵を熊本城下に残し、主力を北上突破へと展開した。以後、戦争はその推移とともに熊本県下各地へと広がっていくこととなるのである。

こうした戦況を反映したもののか、有雄の日記には日々聞こえてくる銃声・砲声が記録されている。有雄は開戦当時宮山村に滞在して、火伏地藏作りなどの石工仕事を行っていた。二月二一日条では小銃の音が鳴り止まないこと、「六半五ツの頭(午前七時から八時にかけて)」「九つ(午後二二時)」に大砲の音が聞こえたことが記されている。日記の内容が混雑したものか、これは二二日の熊本城攻防戦の戦闘を指したものと思われる。この日は終夜熊本の方角が明るかったことも目撃している。

翌二三日も小銃の音が数限りもなく、「竹の子をいづる(煎る)が如く」聞こえた、としている。大砲・小銃の音は巳の刻(午前一〇時)ころ一旦止んだものの、夜通し大砲の音がして、明け方ころにまた激しくなった。同日条では城下町の焼け跡に対し、「壱間一坪式円五拾銭宛」で補償がされるという情報も書付けられている。阿蘇の宮山地域にも、早々にこうした情報が届いていることが注目される。一九日に行われた熊本県庁の御船移転についても、有雄はこの日情報入手している。

また、このとき有雄の周辺でも行軍する薩軍兵士の姿が目撃されはじめている。二五日には薩軍三〇〇人ほどが、二七日には四人ほどが万徳(西原村小森万徳)を通行している。特に二七日の通過の際には、人夫三〇人・馬二八頭の抛出が宮山村に求められた。人夫は一人宛て六三匁、馬は一頭七〇目の賃金が定められているが、恐らく行軍する薩軍の弾薬運搬などに使役されたものだろう。

こうして薩軍が近傍を通過するのを見聞しつつも、有雄は石工仕事の手を止めようとはしていない。二月二八日からは河原(西原村河原)の須倉へ、「地伏石割」へと赴いている。

## 二 阿蘇南郷一揆・田原坂方面の戦闘

西南戦争と同時期に起こった、熊本・大分・長崎の農民一揆は、処罰者が総勢五万人余にのぼるといふ大規模なものであった(この内三万人余が熊本県内一揆参加者)。熊本県内における一揆は、

主に戸長・用掛ら村役人による民費取り扱いへの疑惑などに起因したもので、明治九年末より不穏な兆しが見えはじめていた。翌一〇年正月には県北を中心とした地方で高揚しはじめ、農民たちによる集会や集団交渉が行われていた。民権党からの指導もあって、農民たちは「戸長征伐」といった実力行使にまで及んだが、西南戦争開戦前の二月上旬には県北の一揆は鎮められている。

しかし、明治一〇年熊本県農民一揆で最大の規模となったのは、阿蘇郡における打ちこわしであった。参加村数一一ヶ村、参加人数は九千名弱にも上った。二月下旬から三月にかけて村役人・地主宅への打ちこわしが行われ、同時期には上・下益城、宇土、八代などでも農民沸騰が起こっている。これら一揆は西南戦争の混乱とともに展開し、戦争の趨勢と軌を一にして鎮静化していった<sup>11</sup>。

阿蘇一揆は有雄日記にも現れている。河原須倉で石割りの準備にあたっていた有雄は、三月三日に阿蘇南郷谷で一揆が起こったことを聞いている。一揆勢の蜂起によって、南郷の役人たちは山（阿蘇外輪山か）の西へ逃げ籠もつたらしい、という情報である。

これは二月二八日に内牧で起こった打ちこわしが、南郷谷へと波及したものであった。同日、民費増徴の疑惑などについて、内牧浄信寺で村役人と農民たちの集会が開かれていた<sup>12</sup>。村役人たちが事態の收拾にあつたものの、副戸長高木彦太郎の逃亡などもあって、農民たちは沸騰した。地主・板屋（杉原家）の打ちこわしを皮切りに、宮地・坂梨へと打ちこわしが行われた。この情

報は阿蘇谷の周辺村々にも伝わり、三月一日・二日・三日にかけて不穏な情勢となった。このとき南郷で行われた打ちこわしでは、三戸が被害にあっている。

こうした情勢の一方で、有雄の三月三日日記条では再び大きな戦闘音も記録されている。午前中より須倉から戌の方角（西北西）にかけて、小銃の発射音が切れ間なく聞こえ、間々大筒の音が雷のように響いた、としている。有雄はこれら戦闘音を、熊本より北の方角に聞いている。有雄とともにこれを見聞きしていた人は「高瀬の方だろう」と述べているが、これは恐らく同日行われた田原坂戦のものであると考えられる。この日、木葉（玉名郡玉東町木葉）・田原坂方面では、田原坂台場に集中した薩軍と政府軍第一二旅団との間で激しい戦闘が展開されていた<sup>13</sup>。この戦闘の結果を指すものか、午後には亥の方角（北北西）に煙が立ち上っている。また、木葉・横島（玉名市横島町）方面の間道筋にも煙が五箇所ほど立ち上っているのを目撃している。こうした田原坂方面での激戦と同時期に、阿蘇一揆も激化・展開していく。

ちなみに、同日の日記では植木方面で政府軍・薩軍の戦闘が行われた結果、両軍ともに残兵二、三〇人となって政府軍が逃走した、との情報が記録されている。二月二七日から熊本鎮台との連絡を目指す政府軍と、これを阻止しようとする薩軍の間で高瀬の戦いが行われているが、実際にはこの戦いは政府軍が勝利している<sup>14</sup>。戦闘の情報が誤って伝えられたものか、こうした局地戦があつたものか、判然としない。また、有雄は三日の夜五ツ（午後

八時)に再び須倉に登って情勢視察を行っているが、熊本から北の方角にかけて火が炎々と続いているのを確認している。突如熊本方面に銃声が聞こえたので目を向けると、花火らしきものが見えた。有雄は狼煙の類だろうと推測している。

翌四日には引き続き大砲の音が響き渡るなか、一昨日(三月二日)に起こった南郷一揆について続報を得ている。南郷では「打崩し」、そして「焼うち」が行われたらしい、との情報である。阿蘇一揆の場合、「盗るな、焼くな、殺めるな」の三是が一揆勢の合言葉だったとされる<sup>15)</sup>が、南郷谷ではこれを逸脱する動きがあったものだろうか。

焼き討ちの真偽は不明だが、一揆勢が相当に厳しい態度で村役人・地主層に対峙したことは事実である。既述した内牧浄信寺集会では、鳶口・鉦・斧などの得物を手にした農民たちが説諭者を「打殺ス」と口走るほどに沸騰している<sup>16)</sup>。有雄は「久かたの天津雲のさへぐにぞ 国民くさの乱やハせん」との一首を詠んでおり<sup>17)</sup>、戦争と農民一揆の混乱を関連して捉えていたと思われる。三月六日条では、阿蘇付近において「金持」・役人宅が打ち崩しに遇ったことを聞いている。また、阿蘇一帯での一揆騒動の為に、「知事様御一門」が錦野(菊池郡大津町錦野)から布田(阿蘇郡西原村布田)へと移ったという情報も得ている<sup>18)</sup>。このように、戦争による混乱や一揆勢の打ちこわしなどによって阿蘇谷の治安はかなり不安定なものとなっていた。様々な得物を手にした農民たちは、三月初旬にかけて数千ともいう規模の集団で打ちこ

わしを行っている。当時熊本県下でも有数の銀主であった大津錦野の赤星家は、迫る一揆勢に対して帳元を派遣し、「どのような相談にでも乗るから打ちこわしは止めてくれ」と頼んでいる(三月七日条)。一揆勢と対峙した村役人衆・地主・銀主たちも、それぞれに自衛の手段を模索したことが分かる。

六日の日記では朝から竹が火で爆ぜるように小銃の音が聞こえたこと、高瀬の方角で銃声があったこと、終夜銃声が絶えなかったことも記録されている。このとき田原坂付近では前日から引き続き激しい戦闘が行われており<sup>19)</sup>、恐らく有雄が耳にしたのはこの戦闘音だと思われる。また、保田窪(熊本市保田窪)に薩軍が陣取りしたこと、薩摩から大援軍がやってきたらしいことも記されている。ここに「西郷吉之助」の名も見えており、戦況が推移するにつれて、徐々に薩軍についての情報が明らかとなってきたことが分かる。宮山付近では薩軍の人夫役に出る者も出てきており(三月七日条)、こうした関係からも情報入手の機会が増えたとと思われる。村人たちも自衛のため、或いは人夫役による駄賃稼ぎのために活発な情報交換を行いはじめたものと考えられる。ところで、石工として生計を立てていた有雄は農民一揆勢に対してどのような目を向けていたのだろうか。日記では一揆勢の動きを逐一記録しながらも、有雄は一揆に全く参加・関与しようとはしていない。

三月一日、有雄は一揆の談判として宮山・木森(西原村小森)が騒ぎになったことを聞いて、次の二首を詠んでいる。

「久かたの 天津めくミ（恵み）を待もせて あしき風にやさ  
わぐ民草」

「仇に吹 風に乱る民草の 何をうらみに立さわくらん」

これらの歌から明らかな通り、有雄は農民一揆とは一定の距離を置いていたといえる。その理由については推測とならざるを得ない。しかし、農民・在御家人身分の出身でありながら<sup>20</sup>、一揆勢を相対的に見ていたのは有雄の個性に拠るところが大きいと思われる。有雄は当時石工として生活しており、土地所有・農業生産とは関係が希薄だったこともこの背景にあると考えられる。

宮山・小森談判を指すものか、この日（一日）宮山・小森以下周辺五集落の農民たちが結集し、「がふ家（豪家）役宅」を打ち崩し、多年の労苦を晴らさんとの評議を行っている。この前日には上色見村（阿蘇郡高森町上色見）で一揆・打ちこわしが起こった<sup>21</sup>ことが伝わっており、恐らくこれに影響されたものと思われる。但し、評議途中で万徳の酒屋春木平太、小森の用掛須藤彦太郎、同土族長田吉之助の三名が加わった。経緯は定かでないものの、この三名が農民たちの評議結果の「取計」をすることとなった。

三名は豪家・役宅の者に対し、①取立金の納金を帳面で清算すること、②一月徴収の税金は小前へ割り戻すこと、③借錢の利率改定、④賃銭は壱歩とすること、⑤古借錢の利率は元来通りとすること、という五点を約束させた。この約束を聞き入れないならば、自分たち（春木平太以下三名）も打ちこわしに参加するつも

りだ、と恫喝している。農民たちの結集（一揆）を背景としつつ、春木たちが一揆代表者として交渉を行ったことよって、宮山付近における実力行使（打ちこわし）は水際で回避された。

一方、南郷一揆勢は借錢利率を年中一割（小前は三分の一）と認めさせた上で証文を書き替え、印形を取り、古い証文は焼き捨てるという実力行使に及んでいる<sup>22</sup>。南郷一揆勢は一〇日・一日にかけて白川村・吉田村（阿蘇郡南阿蘇村白川・吉田）に押しかけ、約二〇〇人で各債主と交渉にあたった<sup>23</sup>。

阿蘇の一揆勢は村役人や地主・銀主たちの家屋を打ちこわし、証書類を焼き払うなどして荒れ狂った。しかし、戦争が経過するにつれて政府警視隊の阿蘇進出が行われ、小国で結成された有志隊などとともに一揆鎮定が進められた。南郷谷でも三月一四日には警視隊の一部が坂梨から吉田新町へ進出し、二重峠に陣を張っていた薩軍に対抗している<sup>24</sup>。一六日条の有雄日記では「朝廷じゆんさ（巡查）一五〇人が阿蘇へ入ったものの、予め申し合わせて置いた一揆勢に取り囲まれた、と記録している。鉄炮数百挺・竹槍・鎌・鉞などを持って集まった一揆勢は巡查たち五〇人と対峙し、これを南郷へと追い払った。阿蘇一帯の一揆は三月中旬には鎮静に向かうが、この段階までは一揆のエネルギーが相当程度高揚し、維持されていたと考えられる。

これを表すように、三月一六日に宮山・河原では「寄方」（寄合）が持たれている<sup>25</sup>。寄合では人夫に対して県から支払われる賃銭が滞っていることや、熊本での火事のことなど諸情報が交換

されたようだが、その実際の目的は一揆に関する相談であった。寄合は翌一七日も行うこととし、籤取りを行って一組から二名ずつ留め置いている。一揆は構成員に対し、一定の強制力を持って結ばれたことが分かる。

有雄はこうした村人たちの動きについて、またも冷ややかな視線を送っている。一七日条の日記では朝夕に一揆の企てをするといつて板を打ち鳴らし、人々が寄り集まっているのを見て、「民くさの、板をたゝひて集れと、ととふ（徒党）を結ぶことのおろかさ（愚かさ）」との歌を詠んでいる。この日、とうとう宮山・河原の一揆勢は河原の戸長・用掛の元へ、「惣小前」で詰め寄った。農民たちの勢いに危険を感じたのか、日が暮れると河原の副戸長をはじめ、村役人の面々は逃げ出してしまった。

翌一八日、阿蘇北外輪山を越える二重峠、河陽村（南阿蘇村河陽）黒川で激しい戦闘が行われた。この戦いにおいて佐川官兵衛が戦死するなど、警視隊は多くの犠牲を出して敗北した<sup>26</sup>。有雄は二重峠に一三本の白旗を目撃したほか、黒川戦の模様などを一八日の日記に記録している。同日の日記で有雄は阿蘇における情勢について、「民ん勢ハ薩二付」「福家ハ官二付候よし」と記している。つまり、民衆は薩軍側の立場を取り、経済的富裕層は政府側の立場に立ったことを明確に述べているのである。明治一〇年県下他地域で起こった一揆と同様に、阿蘇地域でも経済的に困窮していた農民層は、薩軍に一種の「解放者」的期待を寄せていたのだろう。薩軍の劣勢・敗走が続き、警視隊など政府軍出張によ

る治安回復が進むと農民一揆は急速に鎮静化している<sup>27</sup>。

### 三 有雄の軍夫従軍と豊後方面 有雄日記に見る軍夫

近代軍制が確立し、輜重兵・輸送部隊などが軍隊内に設置される以前、戦争は多くの人夫を必要とした。人夫は一般民衆から徴発され、武器弾薬その他諸道具の運搬などに充てられた。近世期においては国役としても存在し、幕末期における幕長戦争でも多くの人夫が使役されている<sup>28</sup>。

西南戦争においても、やはりこれは同様であった。戦争遂行上、弾薬や負傷者・戦死者運搬などに多くの人夫が使役された。特に戦場となった熊本県では、政府軍・薩軍双方によって村々から人びとが集められ、後方支援へと充てられた。多く集められた人夫のなかには夫仕事で得られる賃金を目当てとして、自発的に参加した筑豊地方の坑夫なども存在した<sup>29</sup>。三月上旬には政府軍輜重部によって、「人夫」に代わって「軍夫」という呼称が用いられ始めた。五月には規律・統制に関して、軍夫は軍属と定められている<sup>30</sup>。

軍夫は請負人を通じての徴発が行われたほか、村ごとに徴発人数が割り当てられ、半強制的に徴発された。軍夫には「二十人長」・「百人長」など一定人数単位での統率人が設けられ、その統制が図られた。しかし、戦争の長期化や農繁期の到来などを迎えると、脱走や軍夫徴発拒否といった民衆の抵抗が相次いでいる<sup>31</sup>。



直接戦闘に参加しないとはいえ、軍隊と行動をとるという点で軍夫仕事は常に危険を伴うものであり、こうした点からも民衆たちが軍夫役を忌避する動きが起こったものと考えられる。

また、戦闘が起こった地域では政府軍からの軍夫徴発だけでなく、薩軍による強制的徴発も多く行われた。村によっては政府軍・薩軍双方から二重の徴発を負担させられた地域もあり、戦死者・負傷者運搬などを担っている<sup>32</sup>。

甲斐有雄の日記では前述の通り、二月二七日に薩軍が万徳を通過した際、宮山から人夫・馬が出されたことが記されている。また、三月七日には有雄自身も薩軍戦死者の運搬仕事に出ている。残された記録こそ少ないものの、薩軍による軍夫徴発は県内各地で広く行われたものと推測される。

こうした人数徴発に対し、負担者である村々はどのような対応を取ったのだろうか。有雄が戦死者運搬に出た三月七日の日記では、小森村の「士族平民有男」で籤取りを行ったことが記録されている。いつ何時軍夫徴発の命令が来たとしても、この籤取りによって決まった順番で役に出る、と定めたのである。ここから夫役の負担者たる村々では、村内での公平な夫役徴発を志向したことが分かる。また、三月七日時点で熊本近在の村々はすでに三度、四度も軍夫役に出ており、戦場となった地域などではその負担も大きかった。やや時期が遅れるが、四月三日条では河原村からの出夫順番・人数が記されており（一番より七番まで、延べ人数四八四人）、籤取りによる出夫順番の決定は広く行われていたよう

である。

小森村での籤取りのあと、日記からはしばらく軍夫関係の記事が消えるが、三月下旬頃よりその記述が多くなる。日記の記事内容からすると、当時有雄が暮らしていた宮山付近からは薩軍軍夫に多く出ていたようである<sup>33</sup>。薩軍が当該期において宮山付近一帯に影響力を持っていたことが想定されるが、同時に「民ん勢ハ薩二付」「福家ハ官二付候よし<sup>34</sup>」という阿蘇地域民衆の動向もこの背景にあるのではないだろうか。三月下旬以降、有雄日記には戦場の様子などの聞き書きが数多く記されているが、恐らくこれらは軍夫役に出た村人などから入手した情報であろう。軍夫たちからもたらされたと考えられる情報の内容は多岐に亘るが、具体的なものが多く興味深い。

例えば、三月二八日条では軍夫（日記中では「陣夫」）に出かけた人の話によると、大砲が当たった木はすべて粉々に打ち折れていた。軍夫として食料運搬に出かけたところ、ぬかるんだ田にぼとぼと雨が降るように大砲の弾が落ちてきた。また、戦場において薩軍は死骸を一つも残さないのに対し、政府軍は五〇人を一穴に埋め、あるいは野山に死に晒しにしている、という比較が為されている。薩軍戦死者は川尻へと運んで葬られ、大将二人は高さ五尺（約一・五メートル）の石塔が建てられていた。日記では石塔の装飾にまで記述が及んでいるが、これは石工・有雄の個人的興味に基づくものだろう。

日記には戦争の犠牲者となった軍夫についても記されている。

三月二八日条では、安政橋付近で城から放たれた大砲によって河原村の軍夫一名が即死、一名が生死不明となった。このとき生き残った者はそのまゝ薩軍に使役されている。さらに四月五日、宮山村から出た軍夫が一八人即死している。有雄は翌六日条において、一八人即死の報せを聞いた村人たちが泣き悲しんだ様子を書き留めている。

従来軍夫の犠牲については資料が少なく、その記述も困難であった。しかし本日記に明らかのように、実際は多くの命が失われたものと考えられる。また、西南戦争における軍夫については主に制度面からの検討が行われてきたが、具体的な動向や被害状況については情報が乏しく、研究は困難であった。こうした点で日記に記載された種々の記録は重要な意味を持っている。

軍夫たちは薩軍勢の様子や、その動静についても情報を持ち帰った。ただし、この中には意図的に薩軍が流したと思われる情報も含まれている。四月一日条では薩軍が鎮台兵に向かって、籠城ばかりしているならば「へこ」(禰)で首をくくれ、と呼びかけたという話を書き留められている。有雄はこれに対し、恐らくこれは薩摩からの「廻し書状」(偽報)だろうと薩軍による喧伝を疑っている。阿蘇南郷百姓一揆へ向けた視線と同様に、有雄は自身が接する情報に対し、相対的・客観的な分析を行っているといえるだろう。薩軍による偽報は多く流された見え、日記には戦況が政府軍に傾いた四月以降も薩軍兵力増派などの噂が散見される<sup>35</sup>。但し、五月初旬以降は政府軍の動きを伝える情報が多く

なっており、戦況の推移とともに宮山付近における薩軍の影響力は次第に後退したものと推測される<sup>36</sup>。

このように有雄は日記に軍夫から戻った者たちの戦争話を種々書き留めながら、以前と変わらず石工仕事に励んでいた。これが大きく変わったのは七月一九日からのことである<sup>37</sup>。有雄も政府軍の軍夫として従軍することになったのである。

### 豊後方面への従軍

田原坂における薩軍の敗退以降、物量に勝る政府軍の優勢は明白なものとなっていった。四月二〇日の御船の戦いにおける薩軍敗退は、こうした戦況変化の分岐点とも呼べるものである<sup>38</sup>。御船の戦い以降、戦争の様態は九州各地へ敗走・転戦する薩軍を政府軍が追い詰めていくようなものとなっていく。五月から七月にかけて豊後、日向と戦場は移り、九月にはわずかな兵力で残存した薩軍が鹿児島城山へと立て籠もることとなるのである。

甲斐有雄が軍夫として豊後方面へ出発することになった七月下旬は、野村忍助率いる薩軍奇兵隊が依然として同地方で政府軍と攻防を繰り返している段階であった<sup>39</sup>。薩軍は険峻な山地に拠って兵力・物量差を補い、政府軍の猛攻に耐えていた。

こうした戦況のなか、有雄は先に軍夫へ出ていた十大区一小区(阿蘇谷)の宮本彦人の後を継ぎ、二円五〇銭の給金<sup>40</sup>で七月一九日から軍夫へ出るようになったのである<sup>41</sup>。五月から六月にかけての日記が欠損しているので詳細は不明だが、恐らく籤引きで



予め出夫順番が決められていたものと考えられる。当初有雄が配属された「高木組番」は百人長金田某に所属する、総人数三〇人の組であった<sup>42</sup>が、展示資料二四「軍夫受払帳<sup>43</sup>」によれば、七月二四日には「亀甲組式番」に配属が改められている。以後、

二〇人長中嶋藤太郎（林金蔵の代理）を含めた、組人数二一人で従軍することとなった。亀甲組は薩軍の包囲から解放されて攻撃・追撃に転じた、熊本鎮台歩兵第一三聯隊第二大隊第二中隊に所属した。

豊後方面へと移動を開始した有雄たち亀甲組は、七月二三日に酒利村（大分県佐伯市宇目町酒利）の南の方角に戦闘音を聞いている。大・小砲が激しく撃ち合われたこの戦闘の結果、薩軍五〇人・政府軍一〇人の即死者が出たと有雄は

聞きつけている。山間の狭隘地における両軍の戦闘を聞きながら、有雄たちは二七日に重岡（佐伯市宇目大字重岡）の夫小屋へと入った（地図中①）。

有雄たち軍夫の仕事内容は多様なものだったようだ。重岡到着の翌二八日には竹木の切り出しを行い、八月三日には草鞋作りを行っている。さらに翌四日には弾薬・機械運搬の命令を受けて、鎮台歩兵たちと共に大平村（佐伯市宇目大字大平）へと出た。この移動に連続して芦刈村（豊後大野市三重町芦刈）の「猿返し山」に登ると（地図中②）、五日に大原村（豊後大野市大野町大原）へ到着した（地図中③）。

翌六日、兵たちと行動を共にしていた亀甲組は戦闘の場面を間近で見ることとなった。大原村から二里（約七・八キロ）ほど離れた険しい山を、道に繁る大松を切り伏せながら登ったところで薩軍と打ち合いになったのである。恐らくは待ち受けていた薩軍から襲撃されたものだろう。この戦闘の結果、鎮台兵三人が即死、負傷者は四三人に及び、隊長も銃創を負った。薩軍へと切り込んだ二名は行方不明となった。険しい山中での行軍はいっ戦闘が起るか予測のできない、危険なものであった。この戦闘被害の後、亀甲組は七日に大原村へと引き揚げている。同日からの悪天候も影響したものの、一〇日までは大原村に滞在している。特に九日に降った大雨では重岡の橋付近で川水が氾濫し、夫方の者一七人が流されてしまった。

一日から再び移動が開始され、一二日の蔵野村を経て一三日

に柳瀬村（佐伯市宇目大字南田原）の夫小屋へと入った（地図中④）。ここで有雄は柳瀬から三里ほどの場所で「勇れき隊」が切り込みをかけたこと、薩軍が柳瀬から一里ほど離れた桑原に居ることなどの情報を得ている。おそらく、これは兵の間で交わされていた情報を書きつけたものだろう。

この日は更に柳瀬より西へと行軍している。鎮台兵たちとともに亀甲組も台場を越えて幾つもの川を渡り、深山へと踏み入った。「大川」（大分県佐伯市・宮崎県延岡市を流れる桑原川カ）の一本橋を渡ると、亀甲組は夫小屋に身を落ち着けた。兵たちは食事を取ると薩軍来襲への備えであろうか、付近の野に身を潜めた。

この周辺では政府軍の「遊医隊」が別個に矢立峠（桑原山南東部、大分・宮崎の県境）の薩軍へと攻撃を加えていたが、攻めるに難く、夜中頃に亀甲組たちと合流した。大所帯となった所為で平地は狭く、膝を立てて寝ることとなった。こうした難儀に有雄も閉口したのか、次の二首を詠んでいる<sup>44</sup>。

「らん菓を からふて知るその時ハ

妻子や友を思ひてすなり」

「鉄炮の 玉の乱れてくる時ハ

ほんに帰りゆる神狂心なり」

一五日に弾薬を荷って柳瀬へと戻ると、今度は熊田（宮崎県延岡市北川町川内名熊田）へと向けて行軍となった。臼杵村から上赤・下赤（延岡市北川町川内名上赤・下赤）を経て、熊本鎮台の本営が置かれた熊田には一八日に到着した。

鎮台兵以下亀甲組が熊田へと足を向けた一五日、延岡を失った薩軍は和田越で政府軍に決戦を挑んだ。兵糧・弾薬が欠乏した薩軍は、総大将の西郷隆盛が前線ですら指揮を執るといふ程の覚悟で戦闘に臨んだものの、圧倒的な物量・兵力の政府軍の前に敗北した。この敗北により、薩軍は政府軍に完全包囲される窮地に陥ってしまった。しかし一八日払暁、政府軍の総攻撃を目前にして西郷以下五〇〇名の薩軍は奇襲を仕掛け、可愛岳を三田井へと決死突破した。有雄たちはほぼ薩軍と入れ替わる形で熊田へと到着したのである。

熊田に到着した有雄は、千名という規模の薩軍降参人を目撃している<sup>45</sup>。延岡陥落、和田越敗戦という決定的な局面に至って、薩軍側諸隊（佐土原隊、熊本隊、協同隊など）が続々と政府軍へ降伏した。可愛岳突破前に西郷隆盛から解軍宣言も出されており、有雄が目撃したのもこれらの降参兵であったと思われる。ここで軍夫たちにも休息が与えられたものか、有雄たち亀甲組一行は二日間で熊田に滞在している。

二日から再び往路を引き返し、北川沿いに一二里（約四八キロ）北上した。明けて二三日、急遽有雄たち亀甲組に豊後・竹田（大分県竹田市）への夜食運搬の命令が下った。竹田までは険しい山道を一一里（約四四キロ）の大移動であり、夜通しの行軍で何とか明け方頃竹田へ到着した（地図中⑤）。前日の長距離移動と併せて、当時四人歳であった有雄の身には過酷な役務だったと考えられる。無事夜食を送り届けた後、亀甲組は竹田の地に二七

日まで滞在となった。

この竹田までの大移動が豊後地方における軍夫仕事の一区切りだったようで、亀甲組は二八日から肥後へと引き揚げることもなかった。阿蘇宮地、大津を経て三〇日には竹宮（健軍）に到着した。有雄は同地で健軍社に参拝し、水前寺見物を行っている。この日は休むことなく下無田・中ノ瀬（熊本市画図町大字下無田）を通り、阿高の山（熊本市城南町阿高）を越え松橋（宇城市松橋町）まで赴いた。

しかし、有雄たち亀甲組軍夫は豊後方面への従軍で解放とはならなかった。そのままの足で熊本鎮台兵たちとともに、鹿児島・城山まで従軍することとなったのである。城山には四〇〇名以下の寡兵となりながらも鹿児島を奪還した、西郷以下の薩軍諸将が立て籠もっていた。

### 鹿児島・城山への従軍

有雄たちは亀甲組二〇人長の中嶋藤太郎を松橋で待ち受け、九月一日に合流した。鹿児島へ赴くにあたって軍夫の再編が行われたようで、ここで百人長が北川善次郎という人物に代わっている。ちなみに同日、西郷以下の薩軍が鹿児島市中へ乱入し、城山を政軍から奪還している。

明けて二日深夜（三日の午前三時）、亀甲組は鎮台兵たちとともに松橋の港から出港した。日記では一中隊が一二船に分乗したとあるので、松橋の港はこれらの船団で混雑したと想像される。

船はまず三角半島沿いに西へ進んだ。朝日が昇り始めたころ、有雄は「まちやの町」（宇城市不知火町松合）を右手に見ている。途中、有雄は船上から見えた天草・老岳などの風景を簡単にスケッチしている。

船は鹿児島県出水・米の津港（鹿児島県出水市米ノ津町）へと着船した。当時、肥後・薩摩の国境に所在する、いわゆる「三太郎峠<sup>4</sup>」の険を迂回するために松橋・米の津港間の船往來は活発であった。鎮台兵以下軍夫たちもこうした航路を利用したのだろう。先に着いた有雄たちは友軍船が到着するのを待ったが、全船が米の津港に入ったのは日没後であった。軍夫たちが松明を作り、一行は田の畦道を進んだ。四日は出水・麓付近の空き家に宿を取っている。五日も同所に泊ったようだが、有雄は同宿の者から「鹿嶋」（薩摩郡鹿島村、若しくは鹿児島城下を指すものカ）より三〇里先にある旧殿様隠居領に町屋中の者が居るといふ情報を得ている。鹿児島市中の戦火を避けるため、島津隠居領への避難が実施されたのかもしれない。

六日から麓を出発し、南方の山道へと向かうことになった。有雄はこの日歌を五首詠んでいるが、豊後方面と同様に山道は困難なものだったのだろう。深い山の奥へと踏み入っていく心情を率直に詠んでいる<sup>4</sup>。出水方面から真っ直ぐに鹿児島を目指し、一行は紫尾山を越えているが、現在の国道三二八号とほぼ重なる道を選んだようである。紫尾山の峠を無事に越えると、紫尾の温泉を左手に見ながら先へ進んで千代川を渡った。一日で峠越えを果

## 鹿児島・城山への従軍



たした有雄たちは、この日宮之城町（薩摩郡さつま町宮之城屋地）の町外れに宿を取った。軍夫たちは旧藩「御蔵の役場」が宿営地に充てられ、亀甲組のほかにも山川組・松下組という軍夫組が同宿となっている。翌七日から宮之城で暫時滞在となったよう、一〇日まで有雄は手紙などを認めて過ごしている。

一日朝に宮之城を出立し、山崎（薩摩郡さつま町山崎）で大川（川内川）を歩いて渡った。ここから更に一里ほど南下し、「温泉」と温泉を過ぎて入来（薩摩川内市入来町）へと入った。入来で昼食を取ったあとは再び山道へと向かい、「栄（ハエ）ノ山」（八重山カ）越えて郡山村（鹿児島市郡山村）へと入った。郡山に着いたのはすでに時間も遅かったようで、村人に会うこともなく宿を探すのに苦労している。わずかな休息の後、一二日夜

明け頃から同所を出立した。「三ツ間道」という峠に差し掛かったころ、大砲の音が間近く聞こえた。既に鹿児島・城山までは十数キロという距離となったのである。ここで有雄たち一行は鹿児島島の城や桜島を見るために、鹿児島市街地南西の田上台へと迂回した。有雄はここで見た風景を三つスケッチしている<sup>48</sup>。一行は道を引き返し、鹿児島島の城山手前から玉薬を荷って政府軍台場へと登った。

先行研究では城山に立て籠もる薩軍に対し、政府軍の包囲が神経質なほどに強固であったことが指摘されている<sup>49</sup>。政府軍は圧倒的な兵力を以って幾重もの竹柵、堡壘を構築し、連日砲撃を加えて薩軍を圧した。これには薩軍を可愛岳で完全に包囲しながら、みすみす突破を許したことへの痛切な反省があったとされている。

日記の九月一三日条はこの政府軍による徹底包囲の様子を伝えている。晩になって降り出した大雷雨のなか、夜中ころ城山から薩軍兵が駆け下りつつ発砲を行った。これに対して政府軍は三重の柵のほか、地面には竹の削ぎ杭（スパイク）を敷き、幾重にも包囲して薩軍を待ち受けている状況であった。ごくわずかな薩軍兵に向かって、政府軍台場からは大雨と争うように小銃が一斉射撃された。さらに政府軍は大砲までも放ち、叫び声を上げながら約二時間の撃ち合いとなった。薩軍からの攻撃に対し、政府軍の反撃はヒステリックとも呼べるほどに徹底したものだ<sup>50</sup>と分かる。

翌一四日には「城山に籠もる薩軍は最早三千名ほどであり（実際は四〇〇名以下）、兵糧も残りわずかなので二・三日中には皆城を枕に討ち死にするだろう」との評定が政府軍の間で交わされた。こうした噂により各台場でも用心を堅固にし、軍夫までも草鞋を脱がず、帯を解かず、夜も就寝を許さないといった命令が出された。薩軍掃討を目前にしつつ、政府軍台場の緊張はかなり高まっていたとみられる。一方で最早抗しえないと判断したのか、薩軍からも日々降参兵が出ている。有雄は軍夫仕事を勤める傍ら、一五日以降降参してきた薩軍兵をたびたび目撃している。

二〇日、亀甲組は豊後への従軍以来随ってきた熊本鎮台歩兵第一三連隊第二大隊第二中隊から第三中隊へと所属が改められた。これにより城山西方の第二中隊台場を下り、第三中隊台場へと移っている。これまでの従軍途中でさまざまな人員異動があったとみえ、このとき亀甲組は総勢二五名となっていた。

わずかに残った城山の薩軍は降参兵を出しながらも、最後の抵抗を試みている。二〇日早朝には政府軍台場へ切り込みを仕掛け、さらに田上台地からも切り込みを企てた<sup>51</sup>。しかしいずれも政府軍の圧倒的な反撃や事前の察知により退けられている。

政府軍は参軍山県有朋の指揮下、城山総攻撃の期日を二四日と定めた。二三日には薩軍から政府軍へ最後の使者が派遣され、西郷の助命が願われた。しかし、助命許可は天皇の大権に係るものとして、政府軍はこれを拒絶している<sup>51</sup>。いよいよ両軍最後の戦いに臨むこととなったのである。

政府軍による城山総攻撃の前日二三日、甲斐有雄たちは熊本鎮台大隊本部から陸軍輜重部へと配属が戻されたので、台場を下りて軍夫詰所へと入った。基本的にはここで軍夫仕事は終了したと見え、給金として金二〇円を受け取っている。

九月二四日午前四時、予定通り政府軍の城山総攻撃が開始された。政府軍による大小砲が雨のように降り注ぐなか、薩軍諸将は次々と弾丸に倒れた。被弾した西郷は別府晋介の介錯によって果てた。午前八時までには城山における全ての戦闘が終了した。政府軍第四旅団の記録によればこの戦闘における薩軍戦死者は西郷以下七三名、生捕四五名、合計一八名であった<sup>52</sup>。

同日の日記には午前三時頃より戦闘が始まり、明け方に政府軍が城を乗っ取った、と記されている。西郷は討たれ、降伏人が多く出た、と簡潔に戦闘結果をまとめている。この戦闘による政府軍の戦死被害も併せて書き付けられているが、注目されるのは軍夫の被害者数である。隊（兵士）三名に対し、軍夫は三四名もの人数が「即死」となっているのである。詳細は不明だが、戦場のごく近くまで使役された軍夫がいたのかもしれない。この一方で、有雄たちはこの二四日に軍夫「放免」となっている。

こうして豊後方面への従軍から約二ヶ月、ようやく軍夫役から解放された甲斐有雄は、仲間たちと共に帰途へ就くことになった。軍夫役解放の翌二五日に鹿兒島・田上を出発し、二六日には鹿兒島への従軍往路では素通りした、紫尾の温泉に宿泊している。おそらく長旅の疲れを癒したことであろう。

二六日の日記では、西郷が城山で洞窟に籠もっていた、という情報を得たほか、征討総督本営による張紙（薩軍協力者への自首呼び掛け）の文面も筆写している<sup>53</sup>。

二七日に出水・渡口村を経て、二八日には米の津港から乗船することとなった。仲間たちと一二船に分乗し、翌二九日に熊本・三角半島へ上陸した。上陸後は永尾劔神社（宇城市不知火町）に参詣し、陸路を辿って松橋、宇土へと向かった。二九日は川尻に投宿している。

三〇日に熊本向（迎）町へ入った有雄は、一〇月中旬まで熊本町一帯に滞在している。傘や着物、雑貨などのさまざまな買い物を行ったほか、軍夫詰所などへ出入りして軍夫賃金の清算などを行っている。亀甲組各員との金銭貸借を連日清算しているところからすると、有雄は亀甲組の会計役を務めていたのかもしれない。一〇月一日に河原新町の人夫宿に入ったほか、京町・出京町などに宿泊している。無事の帰郷を亀甲組の仲間たちと祝ったのか、宿では酒宴も催されたようだ<sup>54</sup>。

ところで、一〇月九日の日記には「軍夫日記清書」との一文があるのだが、これが本稿の冒頭で触れた『肥の国軍物語』を指していると考えられる。おそらく熊本への引き揚げ後、軍夫賃金清算などの傍ら日記をまとめたのであろう。

一四日、軍夫百長の元へ詰めて亀甲組員であった甲斐為蔵、遠坂両平らの清算を済ませると、有雄はいよいよ帰宅の途に就いた。一五日に高森へ泊まり、一六日には遂に尾下村の自宅へと戻った。

一六日の日記にはただ一言、「帰宅」とある。豊後の深山に分け入り、鹿児島・城山で薩軍の最後を見届けて帰ってきた有雄の心情をうかがわせるような記述は全く見られない。

## おわりに

以上、甲斐有雄「明治十年日記」を通覧した。

有雄は二月一九日の熊本城炎上の報に際してから、戦争についての諸情報を簡潔に日記に記し続けた。二月下旬から三月にかけて、日記の内容は阿蘇郡農民一揆を中心とした、宮山付近における農民一揆の様子にまで及んでいる。また、有雄は時に自身が得た情報を疑い、客観的な見地から分析も行っている。いわゆる「庶民」的立場から西南戦争はどのように捉えられていたのか、彼らはどのような情報を欲し、得た情報を処理していたのか。これらの点を考察する上で、改めて甲斐有雄日記が持つ重要性が確認できる。

特に七月後半からの日記は、従来明らかでなかった軍夫従軍の様子を伝えるものとなっている。有雄は豊後方面から鹿児島・城山陥落まで従軍しており、西南戦争における軍夫運用の実態を観ずる上でも貴重な記録である。当時の軍による統計資料などではない、一個人の軍夫役実体験者による記録という史料性格もこの貴重性に資している。これまで制度面などの限られた視点から言及されてきた西南戦争期における軍夫について、有雄日記は新たな基礎史料ともなり得るだろう。



日記は右に見た通り、極めて多様且つ豊富な情報を持っている。「庶民が記した明治十年日記」が持つ意義は自明のこととして、当該史料から「西南戦争における情報」「西南戦争における軍夫」といった複数の検討課題が設定可能となるだろう。

然しながら、本稿では日記全体の記述内容を概観することを主題とし、これらの検討をほとんど行い得ていない。また、日記では種々の金銭処理についても記述されているが、本稿では十分に触れることができなかつた。甲斐有雄が残した前・後年の日記分析や神官・安藤経俊日記との比較なども併せて、今後の研究を俟ちたい。

<sup>1</sup> 代表的なものとしては、政府軍第一旅団会計部長川口武定の『従軍日記』(上・下巻、青潮社、一九八八年復刻)、喜多平四郎『征西従軍日誌 一 巡査の西南戦争』(佐々木克監修、講談社学術文庫、二〇〇一年)、佐々友房『戦袍日記』・古閑俊雄『戦袍日記』(ともに青潮社、一九八六年復刻)などが挙げられる。

<sup>2</sup> 水野公寿『一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書④ 西南戦争と阿蘇』(一の宮町、二〇〇〇年)では「日記に見る西南戦争観」という項目が設けられており、当時の熊本県下で西南戦争を記録した日記が紹介されている。しかし、同項ではあくまで当時の民衆が持っていた、薩軍Ⅱ賊徒観の確認が主題となっている。

<sup>3</sup> 甲斐利雄編・猪飼隆明監修『一神官の西南戦争従軍記』(熊本出版文化会館、二〇〇七年)

<sup>4</sup> 但し、『松橋収蔵庫だよりNo.2』に紹介記事を掲載済み。

<sup>5</sup> 熊本女子大学郷土文化研究所編『熊本県史料集成第一三巻 西南役と熊本』(国書刊行会、一九八五年)

<sup>6</sup> 『肥の国軍物語』は、五月一日(旧三月十八日)条が最後となっている。「南郷え官軍式千余騎来るの由。(中略)黒岩両名は、自分の始末書斗を御賞賜金をいたゞき、身影ながらの御奉公。阿蘇郡尾下村甲斐有雄。」とあり、自らの居所・氏名で文を締め括っている。

<sup>7</sup> 『新熊本市史 通史編 第五巻 近代Ⅰ』(熊本市、二〇〇一年)六〇五頁

<sup>8</sup> 前日の一八日午後二時にも、熊本城内から非常を知らせる号砲三発が鳴らされた。

<sup>9</sup> 八代郡鏡町の佐藤立平日記(丁丑戦役日記)によると、熊本城炎上の報は約六時間後に鏡町へと伝わっている(前掲『西南戦争と阿蘇』)。

<sup>10</sup> 『肥の国軍物語』(前掲『西南役と熊本』所収)、二月二日条。「誠に旧藩士族も国を大事に守るなら、かかる難儀は有まじに」と熊本の旧士族関与に言及している。

<sup>11</sup> 片俣村(阿蘇郡産山村)では、熊本城炎上を目撃した同村の藤井伊平により「薩軍勝利」の情報もたらされ、人民沸騰の契機となつている(前掲『西南戦争と阿蘇』七三頁)。明治一〇年熊本県農民一揆は、戦争による県庁移転など権力機構の混乱・機能停止と明確な関連を以て展開している。

<sup>12</sup> 前掲『西南戦争と阿蘇』八二頁。

<sup>13</sup> 高野和人編『明治十年征討軍團記事〔復刻版〕』(青潮社、一九九七年)三七頁

<sup>14</sup> 小川原正道『西南戦争』(中央公論新社、二〇〇七年)一一二頁。この戦いにより政府軍は三好重臣・乃木希典が負傷する一方で、薩軍側は西郷小兵衛が戦死した。

<sup>15</sup> 前掲『西南戦争と阿蘇』八八頁。

<sup>16</sup> 前掲『西南戦争と阿蘇』九五頁。

<sup>17</sup> 甲斐有雄日記三月四日条。

<sup>18</sup> 西南戦争当時、熊本に残っていた元知事細川護久の三姫たちは戦

火を避け、県内各地を転々とする疎開生活を送っていた(三澤純「お姫様たちの西南戦争：史料の解題と紹介」(熊本大学『文学部論争九三(歴史学篇)』二〇〇七年)。三姫たちは大津錦野では地主の赤星家に滞在していた。

<sup>19</sup> 二月四日から政府軍本隊が田原坂に総攻撃を加えたものの、薩軍の猛射や白兵突撃により大きな被害を出した(前掲『西南戦争』一五頁)。

<sup>20</sup> 瀬井家資料一七〇「(甲斐有雄履歴写)」

<sup>21</sup> 上色見村では一揆のシンボルとして紙旗が作成され(三月六日)、「役人退治万民之為」というスローガンが掲げられた(前掲『西南戦争と阿蘇』九九頁)。同様に、河陽村では八日に布製の旗が作成されている。上色見村における一揆の動きは、阿蘇南郷周辺の村々にも大きな影響を与えたと考えられる。

<sup>22</sup> 甲斐有雄日記三月二二日条。

<sup>23</sup> 前掲『西南戦争と阿蘇』一二五頁。

<sup>24</sup> 前掲『西南戦争と阿蘇』一二七頁。

<sup>25</sup> 甲斐有雄日記三月一六日条。

<sup>26</sup> 阿蘇郡長野村(現・長陽村)の「長野惟起日記」では、薩軍に味方した農民によって佐川官兵衛は討たれた、と記録されている(前掲『西南戦争と阿蘇』一五六頁)。

<sup>27</sup> 有雄日記にはこの後も三月一九日条において「村々詰所へ押寄せ」などが記録されている。これは旧暦正月一五日(新暦二月二七日)に起こったもので、草ヶ部・矢津田村の農民たちによる情報の聞き取り違いが原因で、町の打ち崩しや放火に及ぼうとした事件である。内牧で打ちこわしが起こる前日の出来事であり、一揆開始直前の緊迫した情勢がうかがえる。

また、三月二七日条には「南郷下組百姓一揆之打崩し千五百人」とあり、「地獄屋」が一番に打ち崩されたとしている、但し、この詳細は不明である。

<sup>28</sup> 熊本藩では第一次幕長戦争時、小倉へ一万人を超える人夫役を派出している。

<sup>29</sup> 森崎和江「軍夫階層と西南の役」(『暗河』七、葦書房、一九七五年)

<sup>30</sup> 猪飼隆明『西南戦争 戦争の大義と動員される民衆』(吉川弘文館、二〇〇八年)

<sup>31</sup> 三月三日、天草・大矢野島では数百名の村民が軍夫差出に対し沸騰、戸長詰所へ迫っている(前掲『西南戦争 戦争の大義と動員される民衆』一八〇頁)。但し、天草における軍夫徴発への反対運動は、同地が薩摩の影響下にあったことも関係している(『上天草市史四近現代 天草の門』上天草市史大矢野町編近現代部会、二〇〇七年)。

<sup>32</sup> 田原坂一帯での戦闘では戦場となった木葉村で、政府軍・薩軍双方から村人数の徴用が行われた。薩軍からの徴用は無賃金で強制されるが多かったようである。(前掲猪飼隆明『西南戦争』一二五頁〜一二九頁)

<sup>33</sup> 甲斐有雄日記三月二八日条、四月一日条、四月一三日条など、薩軍より手に入れた情報と考えられるものが多い。特に四月一三日条では、薩軍優位の情報に続けて「右薩たい長ておひ荷ひ候人より聞候也」とある。薩軍は木山からの負傷者運搬などに軍夫を徴発している(四月一三日・一四日条)が、こうした機会に得られた(若しくは、与えられた)情報だろう。

<sup>34</sup> 甲斐有雄日記三月一八日条。

<sup>35</sup> 薩軍による偽報と推測されるものは、①薩軍の戦闘勝利、②薩軍の兵力増強の二種に大きく分けられる。ちなみに薩軍に参加した神官・安藤経俊も薩軍兵力優位の情報を書き留めており、こうした偽報は当時県内に広く流布したものと考えられる。

<sup>36</sup> 四月一三日滝室坂の戦い、同二〇日大津の戦いにおける敗戦以降、

阿蘇地方に対する薩軍の影響力はほぼ無くなった。また、熊本県の行政・警察機構回復とともに、五月後半には一揆参加農民の逮捕・取り調べが開始された(前掲『西南戦争と阿蘇』一三二頁)。

<sup>37</sup> 残念ながら日記は五月一八日より七月二日まで欠いており、この間の事情は明らかでない。

<sup>38</sup> 特に薩軍諸隊のなかでも主力であった熊本隊は、御船の大敗で死傷者一六〇名余りの被害を出し、本営以下の名簿も奪われてしまうほどの敗戦となった(高野和人編『西南戦争 戦袍日記写真集』、青潮社、一九八九年、一三一頁)。また、熊本隊として御船の戦いに参加していた安藤経俊は、御船・高野村付近の戦闘で仲間の森正親を失っている(前掲『一神官の西南戦争従軍記』二八頁)。

<sup>39</sup> 前掲『西南戦争』一六三頁。

<sup>40</sup> 戦争初期における人夫賃銭(前掲猪飼著『西南戦争』一五五頁)と比較すると、戦地への従軍手当を勘案しても当該段階は五〇銭ほど増額となっている。

<sup>41</sup> 甲斐有雄日記七月「記」。

<sup>42</sup> 甲斐有雄日記七月二二日・二三日条。

<sup>43</sup> 瀬井家資料「軍夫受払帳」(熊本県文化企画課所蔵)

<sup>44</sup> 甲斐有雄日記八月一三日条。

<sup>45</sup> 甲斐有雄日記八月一八日条。

<sup>46</sup> 八代市日奈久から水俣市に至る間の薩摩街道にある峠で、赤松太郎峠、佐敷太郎峠、津奈木太郎峠を指す。

<sup>47</sup> 甲斐有雄日記九月六日条。

「麓を立て山路ニむかふて

○石<sup>イ</sup>称<sup>イ</sup>ふミ<sup>イ</sup>重<sup>イ</sup>る山の名も志<sup>イ</sup>らで越<sup>イ</sup>行<sup>イ</sup>而<sup>イ</sup>八<sup>イ</sup>何<sup>イ</sup>国<sup>イ</sup>ならん  
軍人の飛登之ともして行先の山また山を秋に見る哉  
向より来る人の

○名しるに荷物重きますら男の見かはつ都も志ふ山の坂

○山越へて山々越えてまた行先も山ニ山哉

○峯越へて又ミねこえて末の峠も有ぬそ志しかりける」

<sup>48</sup> 本書一四四〜一四五頁、瀬井家資料「明治十年日記」写真二六七〜二七一参照。

<sup>49</sup> 前掲『西南戦争』一八三頁

<sup>50</sup> 甲斐有雄日記九月二〇日条。

<sup>51</sup> 前掲『西南戦争』一八七頁

<sup>52</sup> 第一旅団会計部長であった川口武定によれば、薩軍戦死者・降伏者は一〇六名となっている(川口武定『従征日記 下巻』青潮社、一九八八年)。

<sup>53</sup> この張紙は当該期に広く張り出されたと見え、安藤経俊も城山陥落後の帰郷途中で同文を筆写している(前掲『一神官の西南戦争従軍記』一〇一頁)。

<sup>54</sup> 甲斐有雄日記一〇月六日条。